

『医道日用綱目』の版種について

野澤 隆幸, 天野 陽介, 小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所

『医道日用綱目』(全1巻, 1冊)は本郷正豊(生没年不詳)の編集になる医学入門書である。別名は『医道日用重宝記』『医道重宝記』ともいい, その体裁は横型の袖珍本である。和文で簡明に書かれ, 内容は按摩導引・診断・本草・諸病の薬方治療・方剤・食養・針灸と幅広く, 医学分野を網羅している。宝永6年(1709)付の医道日用重宝記と題する正豊自序には「それ医道の玄妙なること浩々として測がたし。ここに医道重宝記は片郷の庸医あるひは医道に志ある俗家のために古人此書を著す。始めには脈を診するの大法をのべ, 薬性の枢要を顕す, 中は病因を論じ, 寒熱虚実を弁じて方をもちゆる意をしるし, 并に加減の例をだして要剤数種を載せ, 又経験の丸散煉薬数品の名方雑方をあげ, 末には日用調羹の食性能毒及び針灸の要穴あるひは五臓六腑の図解にいたるまで悉くこれを記せり。誠に手裏小冊の中に許多の至宝を秘蔵し, 傍辺の素生あさきより深にいたる問津たり。……予僭踰なることをしるといへども, 止むに忍ず即これを校正し粗増益して書肆にさづく。……」とあり, まさに初学者のためのハンドブックとすべく編まれたことが分かる。以後, 江戸末期に至るまで相当流布したとされている。

今回, 『医道日用綱目』の書誌について調査した。使用した刊本は①宝永7年(1710), ②享保18年(1733), ③延享4年(1747), ④宝暦12年(1762), ⑤安永9年(1780), ⑥文政元年(1818), ⑦弘化2年(1845), ⑧嘉永2年(1849), ⑨刊年不明, ⑩明治8年(1875)の10種。

版種は8種確認された。A:①, B:②, C:③, D:④, E:⑤, F:⑥, G:⑦⑧, H:⑨, I:⑩。その翻刻の頻度には目を見張るものがある。各版の間隔はA・B版が23年, B・C版が14年, C・D版が15年, D・E版が18年, E・F版が38年, F・G版が27年であり, 短期間で翻刻されていることが分かる。今回調査した刊本では, ほぼ発刊毎に翻刻していることになる。

A版とB版以降では本文の内容が若干異なる。奥付によるとA版は大坂の書肆・正本屋九左衛門が刊行, B版以降は同じく大坂の柏原屋清右衛門が刊行していた(ただし⑩は明治期の大坂・豊田宇左衛門)。重宝記ものは出版書肆により編集発版されることが多いが, A版・B版の内容の相違は刊行者の意向が反映された改編があったとも推察できる。

序文には2種あった。その相違点は序文の最初「それ医道の玄妙なること浩々として測がたし」の後に「博学び審問師弟伝授するにあらずんば何ぞ其精微を極ることを得んや」の一文が入るか否かの違いである。この一文が入った序はB・C・H版にある。刊行者が替わり内容が改編されたときに序文も改められたが, 何らかの理由によりD版以降は元の序文に戻されたのだろう。

以上, 『医道日用綱目』の書誌を調査した。同書は一回の発行部数が頗る多いため版木が疲弊し, 同版では増刷ができずに翻刻を繰り返したと推察できる。奥付の記載から, 同書の販売は京・大坂・江戸の三都にまたがっていたことも分かった。また, ⑩明治8年(1875)刊本の奥付には「宝永板元版ヨリ／明治三年ニ至り七刻目出版／同八年十一月十七日版權免許」と記されている。今回の調査では同文の「七刻」と近い8種の版が確認された。まさにベストセラーであったといえよう。